

2組 正法寺 佐々木兼子

伝えるということ

最近、お年寄りの方から「私が亡くなったら次の世代は仏壇に手を合わせたり抱擁したり出来ないかもしれません。心配しています」といわれることがあります。私は「今、おじいさん、おばあさんがお参りされている姿を見ておられたら、きっと伝わっているのではないですか」とお答えしています。

しかし、私の中でも、この時代にどう受け継がれていくのか、感じとられていくのか。不安もあるし、伝える力のない無力さも感じています。しかし、伝えることって、昔から不安や心配を抱えながらされていたのではないでしょうか？

家では、以前祖母がお内仏に朝夕のお勤めをしておりました。転ばれたことをきっかけに、ベッドでの生活になり、ベッドに腰をかけてお参りをし、その後は布団に横になってお参りしていました。寝ていることが多くなってからは、父が代わってお内仏をお参りしていました。

その後、祖母が亡くなり、忌明けまでのその場にいる家族でお勤めしていましたが、忌明け後、元の生活に戻る頃、自然と母が祖母に代わってお勤めの役を担うようになっていました。その時私は、「ああ、家のお内仏のお勤めという部分がちゃんと途切れずに続いてよかったです」と、ホッと安心する自分が居ました。この安心感って、日頃は当たり前に誰かに委ね、意識もせずにいたけど、いざ無くなる危険を感じると理由もなく心配になるところから来ていた感覚だったんです。そして、母の姿を見て、「次は私がその役を担うんだ、させていただくんだ」という思いになりました。祖母、母、私へと、伝えられていく中で、大事に、大切に、向き合ってゆく姿勢が伝わります。ここ数年、本山、別院にお参りさせていただく時、ずっと伝わって来ていること、繋がっていることで、「ホッとする」安心を受け取らせていただいている私です。